

マーティン・ワイトの歴史叙述：

『パワー・ポリティクス』と書評「ヒンズリー『権力と平和の模索』」を手がかりに

荏谷 千尋

2024-05-11

I. 問題の所在と限定

- ・ 報告者
 - 専門：政治思想史；国際政治思想史
 - 主対象：エドマンド・バーク
- ・ 目的：マーティン・ワイト（1913-1972）の歴史叙述の特徴の解明
- ・ 問題背景：歴史的アプローチと社会科学的アプローチの対立のなかで見失われている、英国学派の個性、ワイトの個性の発掘
- ・ 近年の重要な研究成果
 - 1. Journal of International Political Theory: 特集号「解釈主義と国際関係の英国学派」
 - 編者：マーク・ビーヴァーとイアン・ホール
 - 2. デイビッド・ヨスト編のワイト著作集（オックスフォード大学出版会）

II. 特集号「解釈主義と国際関係の英国学派」

1. 特集号の趣旨

英国学派はその魅力を広く伝えることに苦しみ、他の学派と区別することが困難な論題やアプローチに焦点を合わせてしまっている。同時に、英国学派は新たな研究の道を切り開く可能性のある他分野や他学派との結びつきを十分に活用することもできていない(Bevir and Hall (2020))。

- ・ 原因
 - 1. 英国学派に混在する二つの系譜
 - 解釈主義と構造主義
 - 2. 解釈主義に沿って国家間関係を論じる者の減少
- ・ 解釈主義
 - 人間の行動は、世界がどのように機能しているか、また、その目的を達成するために何を為すべきかについての信念、概念、理論の集合として緩やかに理解しているものに依拠
 - 制度に対する人びとの信念 > 制度や構造
 - ➡ 英国学派のなかでもバターフィールドとワイトに濃厚に見られる特徴
- ・ ビーヴァーとホールの提案
 - 英国学派は「個人や制度の外形的な特徴ではなく、行為者の行動の意味を決定づけるものに焦点を合わせるべき

2. 解釈主義におけるワイト：「気乗りのしない」モダニスト

- ・ 同時代的コンテクスト
 - 1. 発展的歴史主義の危機
 - 2. 社会科学の台頭
- ・ ➡ バターフィールドとワイトは発展的歴史主義と社会科学の双方の受け入れを拒否
- ・ ➡ 「気乗りのしない (reluctant) モダニズム

彼らは二人とも進歩主義の本質を嫌い、その叙述がしばしば道徳主義的であることに苦言を呈した。彼らは、ナショナリズムに対する進歩主義の手ぬるい扱い、国民国家こそが自由を実現するための最良の手段であるという思い込みを非難した。しかし彼らは、モダニストの社会科学が望ましいとは考えなかった。彼らは、概して、社会科学が暗黙裏に進歩主義的であることを懸念し、また、社会科学があまりに狭義の功利主義だと主張した(Bevir and Hall (2020))。

- ・ ワイトの歴史哲学
 - キリスト教信仰から進歩主義を拒否

- バターフィールドの中立的な歴史叙述を拒否
- クローチェとコリングウッドの解釈主義に立脚
- ➡ 発展的な歴史主義を拒むワイトの歴史的アプローチを支える理論的一貫性は何か

III. ワイトの歴史哲学と『パワー・ポリティクス』

1. 歴史哲学

- ・ 「歴史と国際関係研究」 (History and the Study of International Relations, 1954-1956.c)
 - ワイトの問題意識
 - 歴史上の出来事は固有な事象として叙述すべきか、それとも、出来事のあいだを類推するような一般性を備えているのか
 - 国際政治のように、類似の出来事が少ないが、世界に与える影響力が甚大である場合に、歴史叙述はどうあるべきか
 - R. G. コリングウッドの『歴史の観念』 (1946年) からの示唆

私たちは「歴史」という言葉を、過去の実際の出来事という意味と、それを歴史家が再構成した物語という意味の、2つの意味で用いている。しかし、過去に実際に起こった出来事は、私たちの目に触れることはない。歴史家が再構成したもののなかにしか存在しないのである (Wight (2023a))。

歴史上の出来事のあいだの類似性は、天界上のあるパターンに適合するから生じるのではなく、歴史家の心のパターンに適合することから生じるのだろう。もしそうだとすれば、一般化のプロセスは循環するプロセスである。過去の出来事を、他の過去の出来事から導き出されたパターンに適合するように再構成し、その適合性そのものから一般化を読み取るのである (Wight (2023a))。

2. 『パワー・ポリティクス』の動態史観

- ・ 『パワー・ポリティクス』の構成
 1. 国際政治のプレイヤーである国家を論じた1章から6章 (支配的国家、大国、中小国家など)
 2. 国際政治の環境の特性を論じた7章から10章 (国際革命、国際的アナキー、国際社会など)
 3. 国家間の関係にかかわる11章から18章 (外交、同盟、戦争など)
 4. 国際的な協調の枠組みにかかわる19章から23章 (国際連盟、軍縮、軍備管理)
 5. 結語と読める24章
- ・ 国際関係史の動態的パターン
 - 支配的国家 vs 反支配的国家連合

国際関係史でもっとも人目を引く主題は、国際主義 (internationalism) の発展ではない。国家体系 (states-system) の支配力を手にしようとして、ある国家から別の国家へと連綿と続く、奮闘努力の連続こそ、人目を引いてきた。それ以外の国家の大多数が連合し、消耗を強いる大戦という犠牲を払ってようやく、支配力を手にした国家の奮闘努力を打ち負かすことができた (Wight (1995))

- ・ 支配的国家の言説
 - 国際的な統合、連帯構想を訴える
 - ヘンリー5世：再結合したキリスト教世界によるトルコへの聖戦
- ・ 反支配的国家の言説
 - 自由と独立に訴える
 - 原則：力の均衡
 - 「ヨーロッパの自由」と「海洋の自由」

IV. 書評「平和は自ずと実現するか：ヒンズリー『権力と平和の模索』

1. ヒンズリー『権力と平和の模索』

2. 書評「平和は自ずと実現するか」

結び

主要参考文献

- Bevir, Mark, and Ian Hall. 2020. "Interpreting the English School: History, Science and Philosophy." *Journal of International Political Theory* 16 (2): 120–32. <https://doi.org/10.1177/1755088219898884>.
- Hinsley, F. H. 1963. *Power and the Pursuit of Peace: Theory and Practice in the History of Relations Between States*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wight, Martin. 1995. *Power Politics*. Edited by Hedley Bull and Carsten Holbraad. Revised. Continuum.
- . 2023a. "History and the Study of International Relations." In *History and International Relations*, edited by David S. Yost, 41–49. Oxford: Oxford University Press. <https://doi.org/10.1093/oso/9780192867476.003.0003>.
- . 2023b. "Does Peace Take Care of Itself?" In *Foreign Policy and Security Strategy*, edited by David S. Yost, 79–85. Oxford: Oxford University Press. <https://doi.org/10.1093/oso/9780192867889.003.0004>.
- 高坂正堯. 1964. "いかなる国際機構が平和をもたらさうか：f. H. Hinsley, *Power and Pursuit of Peace*, 1963." *法学論叢* 74 (5): 124–36.